

第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	京都教育大学附属桃山中学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	グローバル人材としての帰国生徒に関わる実践的研究

〈活動・研究の意義および活動報告〉

1 活動に至る経緯

京都教育大学附属桃山中学校では、1975年より特設学級として帰国生徒教育学級が設立され、約50年にわたって帰国生徒教育の研究に取り組んできた。日本の学校生活への適応や日本語力向上を目指した指導にはじまり、海外経験を生かす授業のあり方、個性の伸長、自尊心を育む教育などのテーマを経て、グローバル人材の育成に焦点をあてた研究は本年度で8年目にあたる。

2 活動・研究の目的

帰国生徒教育学級は、令和5年度の入学生を最後に幕を下ろすことが決まっている。帰国生徒教育の研究は大学および附属学校が50余年にわたり共同で行ってきた。本年度は、50年以上の帰国生徒研究の集大成や前述したようなグローバル人材育成に焦点を置いた研究発表会の開催および研究紀要の発行を通して、さまざまな授業モデルを提案することを目的とする。将来的には、帰国生徒の特性や経験を生かした、相互交流を意識した一般学級での授業モデルの提案を発信にもつなげていきたい。

3 活動内容

海外経験を生かした授業や学校行事に加えて、帰国学級独自の学習、個に応じた指導や日本の文化体験等、教員の協力体制を整え、多様な教育を実施した。海外での学びを生かした授業や自身の体験を交流し合う活動は、帰国学級内だけでなく、一般学級生徒との交流や文化祭、人権学習等にも相互交流の機会として組み込んでいる。今年度は、それらの実践に加えて、グローバル人材育成としての帰国生徒教育についての集大成として授業実践を積み重ね、11月に研究発表会をおこなった。



(1) 授業や校内行事での実践…海外での経験を掘り起こし、培った価値観を活かす実践。

〈帰国生徒スピーチ〉国語科教員の協力を得て、7月よりスピーチ原稿の作成に取り組んだ。1年生は、主に海外生活の体験で感じたことについて、2年生は海外生活で体験したことをもとに、現在の日本の社会問題や世界における国際的な課題などについて、自分でテーマを見つけ、原稿を作成した。スピーチは、発表会だけでなく文化祭や人権学習で全校生徒に向けても発信した。令和5年度文化祭では互選により代表に選ばれ、2名が発表した。また12月におこなわれた人権平和集会では1年生のスピーチを取り上げ、代表生徒として発表した。また、年度末には「帰国生徒スピーチ集」を助成金にて作成し、帰国生徒に配布する。研究発表会にご参観いただいた先生方にも送付する。

《**帰国生徒学級体験混入**》3年生の混合編成学級に備えて、1・2年生の3学期に、帰国生徒が一般学級に混入して過ごす期間を「1・2年生帰国生徒学級体験混入(以下体験混入とする)」として1週間設定している。体験混入の目的は、帰国生徒と一般学級生徒の相互理解・交流を深める場としている。帰国生徒が持つ日本以外の文化や価値観に触れてきた経験を共有することで、異文化理解を深めることができた。一般学級生徒にとっても、帰国生徒たちのグローバル人材としての資質に気づき、真似してみたいと感じたり学びのきっかけにしたりする等、学習意欲や自己認識を高めることに繋がっていると考える。助成金にてお茶の水女子大学附属中学校と教員同士の相互交流をおこなうことで、日本の環境に適應するための指導並びにその研究について理解を深め合っている。

(2) 帰国生徒学級独自の学習・活動…需要から自身の視野を広げ、価値観を再構築していく実践

《**日本文化体験**》本年度は、祇園祭曳き初め体験、和菓子作り体験、狂言体験を実施できた。曳き初め体験では、岩戸山保存会の方々にお世話になり、祇園祭の歴史や、鉾や山、装飾品の説明を聞き、その後曳き初め体験をした。狂言体験では、京都府文化生活部文化芸術課主催「文化を未来に伝える次世代育み事業『学校・アート・出会いプロジェクト』」の支援を受け、開催することができた。歴史や背景を知ることで文化をより深く理解し、海外で経験した文化を振り返りながら、日本文化および日本人の心に敬愛の念をもっていることを見取ることができた。

(3) 帰国生徒への支援…個別の課題を見つめ、安心して学習・生活できる環境を整える実践

《**日本語教室**》週に2回の日本語教室では、学習課題のある生徒が集まり、個々の課題に取り組んだ。未学習領域をたくさん抱えている生徒や言語習得に大きな課題のある生徒など様々であるが、入学・編入してきた生徒に応じて、参考書を購入するなどし、大学教員とともに対応している。



(4) 外部との連携および研究の発信(研究発表会実施と研究紀要発行)

「グローバル人材育成としての帰国生徒教育についての実践研究」として、平成27年度より継続して取り組んできた研究発表を11月におこなった。帰国生徒の個に応じた指導や適應教育をすすめるとともに、海外生活で培った資質を自ら見出すことで自尊感情を涵養し、中学生としての育みたいグローバル人材としての姿を明らかにしていくことを目的とした。公開授業では、海外生活経験をどのようにグローバル人材育成に生かすかや価値観の再構築に主眼をおいて、国語科(2年)、社会科(1年)、道徳科(1・2年合同)の授業を実施した。

4 子どもたちへの効果(成果・課題)

海外生活の経験が、自分を形成するにあたって価値のある体験であり、またその経験によってグローバルに活躍するための資質を獲得していることを自ら認識することは、自尊感情を高めていくきっかけになることがわかった。「帰国スピーチ」などの機会に、個人の体験を客観視し、その体験の意義を発信する活動をおこなうことで、価値観の再構築が可能となっている。更に、彼らが積極的に発信することができるのは、帰国学級が、個人の体験を語り、寛容的に受け入れられている環境であることも一因として挙げられる。帰国生徒は海外での経験から多様性を受け入れる力を培っており、さまざまな活動を通して、彼らの受信者としての資質をさらに伸長することができたと考えられる。自身を受け止めてくれる仲間とともに自身の海外経験を意識化、客観視し、伝え合うことで、帰国生は自尊感情を取り戻し、自身の経験をグローバル人材としての資質に昇華させることができた。この過程はまさに帰国生達のウェルビーイングの実現の過程に他ならない。

本校における帰国生徒教育研究は幕を下ろすが、これまでの実践研究は、近年唱えられているウェルビーイングと深く結びついていることがわかった。この研究の成果を、今後一般学級でどのように生かし、新たな研究へとつなげていくかが課題となる。